

創世記32章23～33節、コロサイ書1章21～29節

コロサイ1章21～23節は、信仰の基礎としてのキリストによる創造と和解について述べている9節以下の部分(9～23節)の結びの部分にあたります。21節『神から離れ』の原文に「神から」の語はありません。「離れさせる」「疎遠にする」(アパロトリオオー)は「神から」あるいは「パウロから」が想定されますが、15～18節のキリスト賛歌を受けているので、新共同訳のように「神から」を補って考えるのが妥当です。

この動詞「離れさせる」(アパロトリオオー)は異邦人であるコロサイの信徒たちが以前は、イスラエルの救いの歴史に組みこまれていなかったことを指しています。21節の新共同訳は『悪い行いによって心の中で神に敵対していました』と訳していますが、原文は「心の中で(神に)敵対して(いたため)、数々の悪い行いをしていた」という語順になっています。つまり、神に敵対する心が、悪い行いをする結果を生み出していたという理解をしています。『心の中で』の「心」(ディアノイア)は新約聖書では通常用いられる「心」(カルディア)という語が用いられません。そうではなくて、意識的で自覚的な心の状態を意味するディアノイアが用いられているのです。つまり、かつてのコロサイの信徒たちは意識的に神から離れていたということです。

コロサイ書の著者は、以前のコロサイの信徒たちが意識的・自覚的に神から離れ、敵対していたが、それが日常の行為においても現れていたということです。22節冒頭の『しかし今や』という表現によって、信仰を持った後の状態が洗礼前るときから明確に区別されています。22節『神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し』とは、「キリストの体(＝教会)において、その死を通して神と和解した」ということです。これはキリストの体＝教会において信仰者は神と和解させられる恵みに預かっていることが強調されています。既に著者は18節で『御子はその体である教会の頭である』と言っています。キリストはこの世において具体的に見える形である「教会」を自らの体とし、頭(かしら)としてその教会を導いているということです。22節の『御自身の前に』は原文では「彼の前に」となっていて、『聖なる者』『傷のない者(アモームス)』とがめるところのない者(アネンクレートス)の3つの事柄にかかっています。ですから、22節を直訳すると、「しかし今や、あなたたちをキリストの前で、聖なる者、傷のない者、とがめられるところのない者として傍らにおくために、その肉の体(＝教会)において十字架を通して和解させたの

である」となります。『和解する』という言葉は、たとえば、敵意と友情とを取り替えることが和

解の意味なのです。23節『揺らぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがた聞いた福音の希望から離れてはなりません』と命令文のように訳されていますが、実は原文は「もし……している限りは」という条件文です。原文は「あなたがたが信仰に土台を置き、しっかりとおり、あなたたちが聞いた福音の希望からはずれることがない限りは」という条件文になっていますので、「信仰に留まり続ける(動作の継続)」こと、「(信仰に)土台を置く」こと、そして「聞いた福音の希望から外れることがない」という条件を満たす限りにおいて、神は信仰者を御自身に留めるといいます。23節後半の『この福音は、世界中至るところの人々に宣べ伝えられており』は意識で、原文は「この福音は、天下のすべての被造物に宣べ伝えられた」です。著者は神によって福音を説く奉仕者とされているという自覚を語っています。

映画「あなたを抱きしめる日まで」という映画を見たことがあります。1950年代のアイランドが舞台です。18歳で未婚のまま身ごもったフィロミーナは、世間の目を避けるために親によって女子修道院に入れられます。カトリックですから人工妊娠中絶が出来ません。そこで出産をし、苛酷な労働を強いられます。しかし、息子アンソニーと過ごすわずかな時間を心の糧として修道院で生きているのですが、3歳半の息子を勝手にアメリカ人夫婦の養子に出されてしまいます。それ以後、彼女は片時も息子のことを忘れることなく、息子も実の母親に会いたいとずっと思っていたのです。映画で主演をしたジュディ・デンチは小説を読む老年の女性なのですが、信仰的な信念を持って生きているのです。そして、もとBBCのジャーナリストであるマーティンがその子供探しを雑誌社からの依頼で協力することになります。そして、母子は出会うことができるのです。

聖書にもどります。24節『今やわたしは、あなたがたのために苦しむこと(パセーマの複数)を喜びとし、キリストの体である教会(エクレーシア)のために、キリストの苦しみ(スリプシスの複数)の欠けたところを身をもって満たしています』における2つの『苦しみ』は実は別々の違う原語です。最初の苦しみ(パセーマ)は人の身に起こる苦しみのことを表わし、外部から圧力を受けて苦しむことを意味します。キリストの苦しみやキリスト者の苦難のことです。一方、後半の苦しみ(スリプシス)は「押す」「潰す」の意味を持ち、同じく苦しみを意味します。この言葉をパウロ書簡では15回用いられていますが、一度もキリストが経験した十字架の苦難には用いられていません。つまり、人間の苦しみに用いているのです。

さて、修道院の年老いた修道女は、互いに探している母子に問われても、相手の場所が分からないと嘘の報告をしていたのですが、それは養子に出すことでお金を稼いでいたからでした。しかし、息子と再会でき

ない人間的な苦しみ（スリップシス）をフィロミーナは何十年間も身に受けながら、うそをついていたこの年老いた修道女を最後には赦すと言っています。

コロサイ書の著者は自らをパウロと名乗り、福音の伝道活動において迫害などの苦しみに出会っています。それはキリストのために受ける苦しみであって、そこには希望と喜びがあります。だから、自分の苦しみはコロサイの信徒たちのための喜びであり、キリストの苦しみはキリストの体である教会のためであると言っています。24節後半の『キリストの苦しみの欠けたところ』の直訳は「キリストの苦難の不足分」です。キリストの体である教会の成員の苦しみがまだ不十分であるということです。その不足分をパウロを名乗る著者は自分の身で補うと言っています。それはまた、苦しみを自らの身に負うことを進んで引き受けることをも意味しているのです。そうした覚悟を持った人間は強いのです。パウロを名乗る著者は福音を宣べ伝える者として、自分が受けている人並み以上の苦しみをもって、キリストの体である教会の成員であるコロサイの教会員のためにその必要を満たすということです。25節で著者は神から務め（オイコノミア）を受けましたが、それは『御言葉をあなたがたに余すところなく伝える』ためであり、この務め（オイコノミア）を果たすために、教会に仕える者となったのです。この務めの実現のために著者は仕える者（ディアコノス）となったのです。著者の務めは、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となることでした。

そのために著者はキリストの力によって戦い、労苦するのです（28節）。26節『秘められた計画』は特定のの人にだけ教えられる事柄であり、神のみが人間に教え諭すものことです。『聖なる者たち』は神のための働き手として選ばれた者たちのことです。28節『すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、（すべての人を）教えています』では、『すべての人』が3度繰り返されている。すべての人がキリストにおいて完全な者となることが目指されているのです。ここではイスラエルも異邦人も神の前では区別なくキリストの栄光に浴することが強調されているのです。

先に自分の息子と再会できなくて苦勞している女性の話をしましたが、彼女は修道女が自分に嘘をついて再会を邪魔してきたことを、自分の苦しみを顧みて、赦すということです。彼女は修道院で過酷な生活を強いられていたのですが、その中で信仰を持つに至ります。そして、自分の希望を長年打ち砕いてきた修道女を最後には赦すのです。それが、キリストに結ばれて生きてきた自分自身に最後にできることだったのです。コロサイ書の著者は、教会の中での信仰の未成熟な人たちによって被った苦しみを顧みるからこそ、キリストに結ばれて生きていくことの大切さに気づかされているのです。このキリストに結ばれて生かされていることの恵みに気づかされた者が、どのような相手も赦すことが出来る者とされるのです。